

第四十一回フォト旬会優秀作品(26年6月10日)

自由題

半眼で見下ろす俗世

蟻地獄 中村 晃也

寸評：中国四川省にある世界最大の樂山の大仏です。岸壁を削って高さ71m（奈良の大仏は15m）の像を造り上げたデザイン力に脱帽。人間が小さく見えます。



真夏の夜 首都壊滅の

悪夢見る 池田隆

寸評：薄気味悪い画像にマッチした句。池に映ったNTTタワーの写真をひっくり返した、手の込んだ作品です。右手のみどりは垂れ下がった柳の枝。種々の技が開発されます。



古き世をよくかき混ぜて

よどみ取る 矢沢 正二

寸評：なんともないような写真によくぞ句を付けました。道端の取り柄のないものの写真を撮り、創造的な句をつけることにより立派なフォト旬作品ができることを体験されています。

今月のお題写真



付け句

今月は三春さんの出題です。行き付けの寿司屋のご主人の自慢の額だそうです。

- | | |
|--------------------|-------|
| 1) 良き時代モンゴル手形見当たらず | 大月 和彦 |
| 2) ちゃんこ屋は手形自慢で客集め | 安藤 晃二 |
| 3) 大変だ生命線が消えている | 大月 和彦 |

寸評：

- 1) 歴代日本人の横綱がいた時代を懐かしんでいる。まことに良き時代。
- 2) 寿司屋もちゃんこ屋も考えることは同じ。
- 3) これまたユニークな視点で捉えた傑作。思わず自分の手相を見て終います。今月は大月さんの手腕が冴えました。謹厳な生活の中にフォト句的センスが入って来たのは、進歩か退歩か？これからの変身ぶりが楽しみです。